

# 上原 美術館 通信

No.  
**27**

編集・発行 公益財団法人上原美術館  
2024年9月18日発行(季刊年4回発行)  
公益財団法人 上原美術館  
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341  
Tel. 0558-28-1228  
[www.uehara-museum.or.jp](http://www.uehara-museum.or.jp)



紫式部や清少納言が生きた、10世紀後半～11世紀前半の貴族たちの生活に注目が集まっています。紫式部の『源氏物語』、清少納言の『枕草子』は平安女流文学として著名ですが、この時代には、藤原道長の『御堂閔白記』など、男性の上級貴族も、朝廷の儀式や政務を詳細に記録した日記を残しています。これらの文学や日記は、当時の都での貴族たちの生活を今に伝え、その考え方をうかがうことができる貴重な史料です。

その一方で、同じ時代でも、地方については文献資料がほとんど残っておらず、上原美術館がある伊豆についても、平安時代の人々の営みは、文字資料からは明らかにすることができません。しかし、伊豆には、平安時代の仏像が意外に多く伝えられています。本展は、文献がほとんど残らない、伊豆の平安時代を、仏像を通じて考え感じてみようとする展示会です。

10世紀～11世紀、紫式部や清少納言、藤原道長が生きた時代、あるいはそれに近い時代に造像されたと考えられる

仏像を伊豆南部で探してみますと、下田市須崎地区、観音寺の薬師如来像、同市宇土金地区、向陽寺の阿弥陀如来像、同じ須原地区の如意輪観音像、河津町下峰地区、善光庵の十一面観音像、同町縄地地区、地福院の吉祥天像があります。さらにこの春、国重要文化財の答申を受けた、河津町谷津地区の26体もの平安仏群、南禅寺諸像(現在は河津平安の仏像展示館が保管展示)にもこの時期の像が多く含まれていますから、伊豆南部にはこの時期の仏像が多く伝えられていることに驚かされます。その一方で、天城以北には、伊豆市大平地区、金龍院の不動明王像などがあるものの、この時期の像は少数で、同じ伊豆半島内でも地域差が見られます。

ところで、残念ながらこれらの像の造像事情や来歴はほとんどわかっていません。しかし、地福院像や法雲寺像は南禅寺とは距離的に近い位置にありますし、観音寺像は河津から移されたという伝承があるため、南禅寺と関連する像の可能性が高そうです。さらに、善光庵像に関しては、古くこの寺が火災で焼亡した際、南禅寺から本尊をもらい受けてきたとい



不動明王像(10世紀～11世紀)  
伊豆市・金龍院 静岡県指定有形文化財

う伝説があり、南禅寺に伝来した仏像の一体であることが知られています。

先ほども少し触れましたが、従来、伊豆の郷土史家の間では、「伊豆の仏像の南北問題」と称する話題があり、これは天城から北には鎌倉時代の優品が多く、南部には平安時代、しかも比較的古い像が多いことをいうものです。このうち北に関しては、鎌倉時代の執権を歴任した北条氏の本貫の地であり、北条氏が関わった仏像が多く伝えられている事実から説明できます。一方で、伊豆南部については謎とされてきましたが、こうしてみますと、南禅寺伝来諸像との関係を考えるべきかもしれません。

本展では、以上あげた仏像をすべてご覧いただけますが(南禅寺からは仏像断片を展示)、このうち、善光庵の十一面観音像は、33年に一度開帳される秘仏、法雲寺の如意輪観音像は、60年に一度の本開帳と、本開帳と本開帳の間の半開帳の年のみ拝観が許される秘仏で、いずれも前回の御開帳は平成27(2015)年なので、今後拝観が難しい仏像です。また、12世紀の仏像ですが、松崎町、指川薬師堂の薬師三尊像も、30年に一度開帳される秘仏です。

久しぶりの展示が実現したのが、太梅寺本尊の地藏菩薩像です。本像は古来嚴重な秘仏で、多くの秘仏が、毎年決められた日、あるいは数年から数十年に一度の開帳されるなかにあつて、開帳の定めがないため、太梅寺の檀徒さんでもご覧になった方はほとんどおられないようです。上原美術館では平成3(1991)年秋の特別展「下田市太梅寺の歴史と文化財」において展示させていただきましたが、本展において、30年ぶりの展示が実現します。

三島市安久、長福寺の薬師如来像、十一面観音像、如来形像は、令和元(2019)年、みしまのお寺めぐりの会の依頼で、当館が行った調査で見出された仏像です。このうち十一面観音像と如来形像は、当館の令和4(2022)年秋の特別展「無冠の仏像」で展示させていただきましたが、本展では、この二像に加え、本尊の薬師如来像を初公開いたします。長福寺の三体の仏像は、現在知られる限り三島市内最古の仏像であり、当地の古代史、仏像の歴史に新見をもたらすものです。

その他にも、通常非公開の貴重な伊豆の平安仏の数々を展示いたします。千載一遇の展示。是非ご覧ください。(田島)



地藏菩薩像  
下田市・太梅寺



十一面観音像(10世紀)  
河津町・善光庵  
静岡県指定有形文化財



薬師如来像(11世紀)  
三島市・長福寺



如意輪観音像(10世紀)  
下田市・法雲寺



薬師如来像(10世紀)  
下田市・観音寺 下田市指定文化財



古くから人々に親しまれてきた「ものがたり」は、歴史や文化を越えて自由に想像の世界を楽しむことができます。そして、そこに広がる豊かな世界に心ひかれた画家たちによって、多くの魅力的な絵画が生まれ出されてきました。本展では画家たちによって情趣ある表現で描き出された「ものがたり」を読み解いていきます。

日本画家の小林古径(1883-1957)は歴史や文学への造詣が深く、物語や謡曲をはじめ、仏教などを題材とした絵画をたびたび描いています。なかでも平安時代の歌物語『伊勢物語』は古径お気に入りの主題でした。『伊勢物語』は全125段からなり、それぞれ異なる話が和歌とともにつづられています。

第23段「筒井筒」では、幼馴染の男女のエピソードが書かれています。お互い成長し、恥ずかしさから会わずにいた二人ですが、男が、

筒井つの 井筒にかけし まろがたけ  
過ぎにけらしな 妹見ざるまに  
(井戸の囲いで測り比べた私の背丈も、囲いの高さを過ぎてしまったようですね。あなたを見ないでいるうちに)

と女に歌を贈ります。女はそれに対し、

くらべこし 振分髪も 肩すぎぬ  
君ならずして たれかあぐべき  
(比べ合ってきた私の振り分け髪も肩を越えてしまいました。あなたでなくて誰のために髪あげしましょうか)

と返し、歌をやり取りすることで、心を通わせます。

この第23段に由来する古径の《井筒》を本展では紹介します。作品には、幼い二人の子どもたちが井戸の周りで遊ぶ場面が描かれています。余白を十分とった簡潔な画面からは、背丈や髪の長さを比べあった子ども時代のさわやかな情景が目に見えそうです。

次に、第6段「芥川」では、ある男が、身分の高い女性に許されない恋をする話がかかれています。主人公の男は女を連れて逃避行を続けます。芥川の近くにさしかかり、草におりた露が何であるか知らない女は、男に「あれは何ですか」と尋ねますが、男には応じる余裕がありません。逃げるうちに夜は更け、雷雨も強くなってきました。荒れ果てた蔵を見つけ女を休ませますが、そこで女は鬼に食べられてしまいます。朝になり、女が消えたことを知った男は悲しみのなか、歌を詠みます。

白玉か 何ぞと人の 問ひしとき  
露と答へて 消えましものを



小林古径《井筒》昭和25(1950)年頃 新収蔵作品



小林古径《芥川》大正15(1926)年頃

(真珠でしょうか、何ですか、とあの人が尋ねたときに、「あれは露ですよ」と答えて[私も露のように]消えてしまえばよかったのに)

この話を描いた古径の《芥川》では、暗闇から登場した鬼が、眠る女の前に立ちほだかり、食べようと身構える場面が描かれています。女は何も知らず瞳を閉じて眠っていますが、対照的に鬼は見開いた眼で女を睨みつけます。悲劇の前の静けさと緊張感が、みるものの創造力を一層掻き立てます。

そのほか本展では、ワーグナーの楽劇『ニーベルングの指輪』に登場する女性戦士が遠い眼差しを湛えるルドン《ブリュンヒルデ、神々のたそがれ》、旧約聖書『創世記』より、最初の人類である男女が禁断の果実を受け取る場面を捉えたデューラー《アダムとエヴァ》、新約聖書においてペタニヤのマルタ・マリア姉妹との出来事を描いたルオー《キリストとの親しき集い、ペタニヤ》など、さまざまな「ものがたり」を主題とした絵画を紹介します。これらの作品に寄り添って、耳をかたむけてみてください。描かれた作品が、あなただけにそっと語りかけてくれるはず。画家たちが生み出した多様な「ものがたり」の世界をどうぞお楽しみください。(土屋)

上原美術館のラウンジから見えるちいさな中庭。ここでは、春に枝垂梅が咲き、夏に薄桃色のサルズベリ、秋にモミジ、冬にはオタフクナンテンが鮮やかに色づきます。四季折々の美しい姿を見せる中庭の中心には、彫刻家の山本正道先生(1941-)が制作した《風と少女—Versilia》が佇んでいます。この野外彫刻は、2000(平成12)年に上原近代美術館が開館する際に、ここへ設置されました。

作品名にあるVersilia(ヴェルシリア)はイタリア半島中部、トスカーナ州沿岸部にある地域です。ここには、世界中からさまざまな石が集まる町、ピエトラサンタがあります。その石の町に山本先生は何度も足を運び、無数にある石から選びだしたのが、彫刻作品に使用されたマルモ・ギブリでした。大理石の一種であるマルモ・ギブリは、「Marumo」=「大理石」、「Ghibli」=「サハラ砂漠から地中海を越えて吹いてくる熱風」を意味するイタリア語の名がついています。よく観察すると、黄土色をおびたその石肌には、貝などの化石を含んだ地層の重なりが美しい模様を創り出しています。海の底で積み重なり、長い年月をかけて生み出された自然の大理石ならではの味わいがみられます。



山本正道《風と少女—Versilia》2000(平成12)年

山々に囲まれた美術館に《風と少女—Versilia》が設置されてから、今年で24年が経過しました。本来、大理石は酸に弱い材質であるため、雨風を避け、主に室内で用いられることが多いのですが、この彫刻が長年野外で展示、保守できているひみつがあります。

まず大事なことは毎日の観察・点検、お手入れです。毎朝の見回りで、鳥のフンや虫の巣、落葉などがあれば取り除くなど、わずかであってもトラブルになる原因があれば排除します。そして、最も重要なのは年に数回のメンテナンスです。当館では彫刻の洗浄と、保護膜を塗布することで彫刻を保守しています。保護膜に使用しているワックスは、彫刻の雰囲気を変えないよう、艶が出ない大理石用の特別なものをイタリアから取り寄せて使用。その効果が保たれていると汚れにくく、万が一汚れてもすぐに落とすことができます。このメンテナンスを定期的に行うことで、彫刻の劣化を防いでいます。ひみつなどと大きなことを言いましたが、実はこれは美術館では当たり前の保存・管理方法の一つです。日々の点検、定期的なメンテナンスを続けることによって、大切な作品を守っています。それでも野外彫刻は、緩やかに外部からの影響を受けていますので、

設置当初は黄色みの強かったマルモ・ギブリも、経年劣化により今では落ち着いた色合いへと変化しました。その変化は大理石に穏やかさを加味し、温暖な伊豆の自然と調和してきたかのようにもみえます。

現在、この作品をはじめ、ブロンズや石の彫刻、デッサンなど7点の作品を上原美術館



《風と少女—Versilia》の石肌には、化石の美しい模様がみられます



メンテナンスのようす



山本正道先生と彫刻の状態を確認

では収蔵しています。毎年、山本先生は美術館にお越しくださり、自作の彫刻との再会を楽しみにして下さっています。なかでも「風と少女」は、設置時から、彫刻の保守においてまで、多くのご助言をいただいています。山本先生のお力添えのお陰で、「風と少女」は猛暑や暴風雨、大地震をも乗り越えてきました。

庭の樹木が成長するように、少しずつファンを増やし続けている「風と少女」は、今日も美術館の中庭を通り抜ける風のかたわらで静かに佇んでいます。

\*『山本正道個展』が東京のギャラリー長谷川にて(2024年10月8日～29日)開催される予定です。



ギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会内容について、学芸員が解説を行いました。展覧会会期中は毎月第3土曜日、近代館は10時より、仏教館は11時より開催しています。開催時間になりましたら、各展示室へお集まりください。※要入館券、詳細は当館ホームページ、公式SNS等をご覧ください。

広報活動

ラッピングバス運行

当館のコレクションをプリントしたラッピングバスが、東海バスの三島市、沼津市、清水町エリアを走り始めました。モネ《薫ぶき屋根の家》を中心に十一面観音像など、当館の人気作品が並びます。

番組収録

伊豆の魅力を紹介する番組『いい伊豆みつけた』(伊豆急ケーブルネットワーク制作)の「伊豆の「美」を旅する」(リポーター八木美佐子さん)の回で、当館が紹介されました(テレビ埼玉:8月1日、テレビ神奈川・千葉テレビ:8月2日放映)。番組放映後はYouTubeでもご覧いただけます。

調査

6月25日 富士市・宗清寺調査  
浜松市美術館・島口直弥学芸員の協力のもと、富士市・宗清寺(さくら台幼稚園)の仏像の調査を行いました。

対外活動

7月19日 河津町議会勉強会で南禅寺仏像群の説明  
8月1日 伊豆の国市・真珠院で講演  
田島上席学芸員が、3月に重要文化財指定の答申を受けた河津町谷津・南禅寺仏像群について、河津町議会議員と一般参加者向けに現地で説明を行いました。また伊豆の国市・真珠院では同寺に伝わる仏像について調査成果の講演をしました。

研修受け入れ

7月29日 下田市教員キャリア開発研修  
7月30日 下田市教職員研修  
7月31日 令和6年度未来を切り拓くDream授業  
8月5日 賀茂教育研究会研修

7~8月は4つの研修受け入れを行いました。未来を切り拓くDream授業は静岡県教育委員会主催の賀茂地区の中学生を対象に見学会を行うもので、約30名の参加者がありました。田島上席学芸員が仏教館の解説を行いました。賀茂教育研究会は賀茂地区の美術教職員の勉強会で、美術館の役割や美術鑑賞について学芸員がお話し、実際に展覧会鑑賞をしながら美術館との連携について考えました。



ギャラリートーク(上:近代館/下:仏教館)



ラッピングバス



番組収録



未来を切り拓くDream授業



賀茂教育研究会研修会

博物館実習 8月12日~8月16日

学芸員資格取得を目指す学生を対象に、今年度も静岡文化芸術大学、大東文化大学、京都美術工芸大学から6名を受け入れて博物館実習を行いました。初日は田島上席学芸員から仏教美術コレクションの収集とリニューアル、土森上席学芸員から当館の成り立ちと沿革、事業活動についてお話ししました。また開催中の展覧会の見学をしました。

2日目、3日目は近代館、仏教館のバックヤード見学と、実物作品の取り扱い方を実施しました。近代館では額装作品のコンディションチェック、調書の作成の仕方や額の扱い方を学



夏のワークショップ 当館アトリエ 講師:小野憲一先生

『家族で色あそび、透明水彩で』

● 色マスターになろう!  
7月28日(日)

毎回好評のワークショップ「色あそび」シリーズを今夏も開催しました。このワークショップでは赤、青、黄色の3色の絵の具を混ぜてさまざまな色作りに挑戦。作った色を使って、重ねたり、にじませたりして、たくさんの作品を描いていきます。夢中で描いたら、90分間のワークショップはあっという間に終了。みんな、すてきな色マスターへと成長を遂げました!(土屋)



● あおであそぼう!  
7月29日(月)

「色あそび」シリーズから、青の透明水彩絵具のみで描くワークショップを開催しました。使用するのは一色のみですが、水の量を調整することで、何種類もの青が生み出され、美しいグラデーションを奏でます。さらに身近な道具(ロウソクやスプレーなど)を使って描くと、筆だけでは生み出せない表現が生み出されます。参加者は、色々な技法を駆使して、自分だけのすてきなあおの世界を創り出すことができました。(土屋)



夏のワークショップ 作品展

夏のワークショップで制作した作品を7月31日から8月20日にかけて、上原美術館ラウンジで展示しました。子どもたちの鮮やかな透明水彩や一生懸命取り組んだ鉛筆デッサンが並んだラウンジは、多くの来場者の目を楽しませてくれました。



びました。仏教館は仏像の調書の取り方、掛軸や巻子の鑑賞を行いました。4日目は当館が行っている地域の文化財保護活動について田島上席学芸員がお話し、河津平安の仏像展示館のご協力で、地域に伝わる文化財の現状を現地で見学しました。5日目は実習の集大成として、2グループに分かれて模擬展示の企画立案をしました。実習生が自主的にポスターの作成とギャラリートークも行い、5日間の実習は無事に終了しました。(櫻井)

● 初心者のためのデッサン教室  
7月31日(水)、8月1日(木)、8月2日(金) 3日間

当館のデッサン・水彩画教室講師の小野憲一先生をお招きし、中学生、高校生の初心者を対象としたデッサンワークショップを開催しました。こちらの開催は5年ぶりとなります。新型コロナウイルス感染症の蔓延により一時開催が途絶えていましたが、内容を更新し、今年度から再開となりました。当時中学2年生であった筆者も参加したことのある思い入れの深いワークショップです。今回は6名の参加者が集まり、3日間じっくりとデッサンに向き合いました。1日目には道具や基礎技法について丁寧に学び、2日目、3日目にはそれらの内容を踏まえ、紙コップや石膏の立方体を扱ったデッサンに取り組みました。参加者からは「何時間もかけて描くことが初めてで新鮮だった」、「今後絵を描くときに3日間のことを思い出して描きたい」との声が上がりました。デッサンは描くことを通し、ものを見る力を養います。参加者6名はそれぞれ異なる方法で、新たな視点を獲得していたように思います。(丸山)







下田八幡神社例大祭の様子

今年の夏は全国的に猛暑が続き、緑の山々に囲まれた美術館でも、いつになく暑さを感じました。下田では8月14日～15日に、下田八幡神社の例大祭として、奉具をアーチ状に組み上げる勇壮な太鼓祭りが開催されました。旧町内各区の太鼓台が賑やかに太鼓を打ち鳴らして、町中を練り歩く様子は活気に満ち溢れていました。

この時期、美術館は博物館実習を受講する学生で賑やかになります。真剣なまなざしで実習に取り組み、瑞々しい自由な発想で展覧会立案を行う様子から、こちらもたくさんの刺激や気づきを得られました。秋はいよいよ新しい展覧会が始まります。実習生に負けないように新鮮な気持ちで来館されるお客様をお迎えしたいと思います。(櫻井)



### 企画展『日本が見たドニ | ドニの見た日本』

新潟県立近代美術館 2024年8月27日(火)～10月20日(日)

久留米市美術館 2024年11月2日(土)～2025年1月13日(月・祝)

モーリス・ドニ (1870-1943) は19世紀末フランスで、前衛グループ「ナビ派」の中心人物として、活躍した画家です。セリュジエやボナール、ランソンらとともに、次世代への橋渡しとして、かけがえない役割を担った創作活動を「ナビ派」で実践しました。ドニやナビ派の影響は遠く日本にも及び、「ナビ派の学校」ともいわれるアカデミー・ランソンでは、直接ドニの指導を受けた日本人画学生も少なくありません。本展では、ドニの画業をたどりながら、日本との豊かな交流を紹介します。

当館からはナビ派の仲間であったボナールの油彩画《雨降りのル・カネ風景》と、自筆書簡を出品しています。モーリス・ドニと日本の近代洋画の関係をご覧いただける、またとない機会となっていますので、ぜひご覧いただければ幸いです。(土屋)



### 「清流の国ぎふ」文化祭2024

#### 展覧会『PARALLEL MODE: オディロン・ルドン—光の夢、影の輝き—』

岐阜県美術館 2024年9月27日(金)～12月8日(日)

19世紀後半から20世紀初頭にかけてフランスを中心に活動した画家オディロン・ルドン (1840-1916) を紹介する国内過去最大規模の夢の大展覧会が岐阜県美術館で開催。

ルドンは、木炭画や版画、パステル画や油彩画と様々な技法を変えながら、イメージの世界を描きました。本展では、約300点の作品により、両国で愛されてきたルドンの作品を読み解きながら、知られざる色彩の秘密へといざないます。

当館からはルドン《読書の女》、《ダンテとベアトリーチェ》、《ダンテの幻影》、《花瓶の花》の作品4点を出品します。(土屋)

次回休館日は2025年1月14日(火)～1月24日(金)です。(展示替えのため)